

農業ジャーナリスト
小谷 あゆみ氏

農民作家・山下さんの宿題

佐賀県唐津の農民作家として知られる山下惣一さんが10日、亡くなりました。享年86。農業界の偉人の訃報は多くのメディアに取り上げられ、改めてその多大なる功績がしのばれました。

山下さんは、小説「滅反神社」で直木賞候補になった他、50以上の著作を残されました。その仕事の根底には、国が奨励したミカン栽培に乗り出したものの、輸入自由化による価格下落で一家が翻弄（ほんろう）された自身の痛い経験があります。

2016年には「小農学会」を立ち上げ、共同代表を務めました。「小農」とは、利潤追求のためではなく、そこに住み、暮らしを目的に営む農業で「家族農業」とも称されます。筆者が山下さんに初めてお会いしたのは、19年、福岡で開かれた小農学会の総会でした。

この国の「農」とは何か

著書「小農救国論」や「新しい小農」によると、「近代化農政は、規模拡大、単作化を掲げて、小農を切り捨ててきたが、農業の重要性は持続することにある。『自給的農家』は統計から除外され、小農の存在が軽視されているが、国連は『農業の専門特化はリスクを高める』として、家族農業を評価している。世界の農業の9割以上が家族農業であり、その理由は①農業の規模が家族で行うのに適している②その地に暮らすことを目的としている生業である。土地を所有すると、その土地に縛られることになるが、それゆえに故郷になり、国の土台を形成する③年寄りや子どもの労働力が活かされ、それぞれの役割が与えられる④お天気任せゆえに不作や豊作に左右されるが、だからこそ、規模拡大や専門特化より、小さく地道に、生業として農を営めば倒産する（とはなく）と小農の力を記しています。

小規模、分散型の、複合経営だからこそ持続可能で、リスクに強い。これらは、いま世界的テーマである持続可能な開発目標（SDGs）、国が勧める副業や半農半X、世界情勢による資材高騰で高まる「外部依存しない自給圏」とも重なり、感染症や災害対策にも対応できるレジリエント（回復する強さ）に通じます。

亡くなる2年前、唐津のお宅を訪ねたときの山下さんの印象で忘れられないのは、驚くほど手が大きかったことです。分厚く指は節くれだち、ああ、これが、農民であり作家の手なのだと思っただことを覚えていきます。

偉大なる農民作家は、日本人にとって「農」とは何か、という宿題をわたしたちに遺（のこ）していかれました。その答えはそれぞれがそれぞれなりに探していかなければなりません。

（毎週火曜日付）